

感情に伴う身体感覚自覚と感情制御との関連：身体との関係性及び対処可能感の検討から

小田, 真二

<https://hdl.handle.net/2324/1522384>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（心理学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏名	小田真二					
論文名	感情に伴う身体感覚自覚と感情制御との関連 — 身体との関係性及び対処可能感の検討から —					
論文調査委員	主査	九州大学	職名	教授	氏名	福留 留美
	副査	九州大学	職名	教授	氏名	田嶋 誠一
	副査	九州大学	職名	准教授	氏名	古賀 聡
	副査	九州大学	職名	教授	氏名	松崎 佳子

論文審査の結果の要旨

本研究では、感情に伴う身体感覚自覚と感情制御との関連が検討された。

第1章では、感情に関する概念と理論の検討、および注意や気づきを含めた感情・身体感覚の体験の仕方について、概念的な整理を行なった。感情に伴う身体感覚自覚と感情制御との関連を媒介する変数として、身体との関係性や対処可能感というメタ認知的側面の重要性を指摘し、本論文の研究目的を、「感情に伴う身体感覚自覚」が後の感情制御の良否とどのように関連するのか、また、快-不快のヴェイレンスや身体との関係性、感情・身体感覚に対する対処可能感の違いによって、そうした関連性に違いがみられるかどうかについて検討することとした。

第2章では、大学生を対象とした質問紙調査から、“苦悩不安に伴う身体感覚自覚”と“緊張に伴う身体感覚自覚”の2因子構造をもつ不快感情に伴う身体感覚自覚尺度が作成され、前者の因子が精神的不健康度と有意な関連があることが示唆された。

第3章では、苦悩不安に伴う身体感覚自覚と精神的不健康度との関連について、ネガティブな身体との関係性と、性格要因を加えた検討が行われた。分析の結果、身体との関係性や強迫傾向にかかわらず、苦悩不安に伴う身体感覚自覚は精神的不健康度と有意な関連を示し、不快感情や身体感覚など自己の内的側面に注意を向けるリスクを指摘する先行研究を支持した。

第4章では、快次元の感情を導入し、感情に伴う身体感覚自覚と感情制御（適応感）との関連について、また媒介変数としてポジティブな身体との関係性について検討した。大学生を対象に調査を行い、因子分析の結果、快感情に伴う身体感覚自覚は“穏やかな快感情に伴う身体感覚自覚”と“活発な快感情に伴う身体感覚自覚”の2因子が抽出され、一方、身体との受容的信頼関係は“基盤としての身体への信頼”と“身体との疎通性の重視”の2因子が抽出された。さらに、これらの尺度を用いた検討から、感情制御困難群では、身体的観点を含め、快次元の感情処理の落ち込みが示唆された。

第5章では、対処可能感を保持した形で感情・身体感覚を自覚することが不快感情の鎮静化と有意な関連を示すかについて大学生を対象に調査を行った。ロジスティック回帰分析の結果、不快感情とそれに伴う身体感覚の強度や対処可能感から構成された「感情身体対処可能感タイプ」は、不快感情の鎮静化の良否を分ける変数として有意であり、対処可能感の保持が重要であることが示唆された。

第6章では、事例研究法に基づき、前章までの知見がさらに検討された。その結果、身体感覚や身体との関係性といった身体的観点を重視した心理支援は、不快感情を含む心身の制御不全に苦しむクライアントの感情制御支援に寄与したのみならず、深い内面の作業を可能にする基盤を

提供した可能性が示唆された。他方で、快な感情の導入には葛藤が生起する可能性があり、その場合には丁寧な意味づけの整理が必要になることを指摘した。

第7章では、上記の知見を踏まえて総合的考察が行われた。

以上のように、本研究では、感情に伴う身体感覚自覚と感情制御の関連について、それらがどのような要因と関連があるかを捉え、また臨床事例においても同様の観点がどのように活かせるかについて考察を深めたことから、重要な知見を得たものとして、価値ある業績と判断できる。よって、本論文は、博士（心理学）の学位に値するものと認める。